

横浜市道徳教育研究部

1 研究主題（テーマ）

「主体的・対話的に学び、よりよい生き方を求めようとする心を育てる道徳科の在り方」
～『多面的・多角的に考え、自己の生き方についての見方・考え方を深める指導』～

2 研究主題について

【研究部会】

- ①児童が主体的に問題意識を高めるための学習の総合化の工夫
- ②児童一人ひとりが確かに価値を把握するための工夫
- ③児童が聴き合い語り合う中で考えを深め、振り返りをするための工夫

【研修部会】

「特別の教科 道徳」の基本的な学習過程

3 年間活動報告（研究方法）

今年度は、全体での集合研究会を行うことがなかなかできなかったが、ZOOMによるオンライン開催を中心に研究を進めてきた。

日程	時刻	会場	内容	各種委員会等
4/21	15:00	かながわ労働プラザ	令和3年度総会・講演会 ※紙面総会	
5/12	15:30	白幡小学校 オンライン開催	第1回主題研究会 ・オリエンテーション	
6/9	14:30	県立音楽堂	第1次教育研究大会※中止	
6/16	15:30	白幡小学校 オンライン開催	第2回主題研究会 ・役員提案①・ワークショップ①	・推進委員会総会 ・会員会費集金日
7/7	15:30	白幡小学校 オンライン開催	第3回主題研究会 ・役員提案②・ワークショップ②	・会員会費集金日
9/8	15:30	白幡小学校 オンライン開催	第4回主題研究会 ・指導案検討(実践提案)・ワークショップ③	
10/6	15:30	白幡小学校 オンライン開催	第5回主題研究会 ・実践提案・ワークショップ④ 第1回主題研究推進委員会	区部長会
11/10	15:30	白幡小学校	第6回主題研究会 ・指導案検討(市一授業研究会)・ワークショップ⑤	
12/1	13:45	白幡小学校	第7回主題研究会（市一斉授業研究会）	
1/12	15:30	白幡小学校	第8回主題研究会 ・報告会提案検討・ワークショップ⑥	推薦委員会
2/9	15:30	白幡小学校 オンライン開催	第9回主題研究会 年間振り返り・ワークショップ⑦	
3/9	15:00	白幡小学校 オンライン開催	第10回主題研究会 (主題研究報告会、第2次教育研究大会)	

4 研究の成果と課題（含 第二次研究大会）

昨年度に引き続き、社会情勢を考慮に入れて、会員の皆様と共に作り上げていく研究会を特に意識して運営を進めてきた。今年度は、毎回の実践提案やワークショップによる研究に加えて、授業研究会も行うことができ、昨年度と比べても研究の深まりを感じられる1年となった。

またZOOMなどオンラインを活用したり、事前にメール等で資料を送付し、会員の皆様に考えていただいたことをもとに研究会を進めたりと、様々な工夫を行った。

各部会の主な成果と課題は次の通りである。

【低学年研究部会】

《成果》

研究内容① 児童が主体的に問題意識を高めるための学習の総合化の工夫

(1) 問題意識の共有と個々の見取り

学習の総合化を図る際に、学級目標などを視点に、学級の課題を子どもたちと共有し、その解決を図るための考え方を学級全体で見出してきた。本時の前に問題意識をもち、その時点での課題を、掲示物等を利用して全体で共有することで、本時の導入がスムーズになされることが分かった。ただ、学級全体だけでなく、個をどれだけ見取れているかということも大切であり、教師は事前に一人一人の問題意識を把握して、本時にその思いをどうやって子ども同士に繋げていけるか、そこまでの準備が学習の総合化を図る上で大切なことが見えてきた。

(2) 授業を通しての学習の総合化の振り返りカードの活用

学習の総合化において、子どもが自らの問題となる意識に気付いたり、教師がその見取りをしたりするために振り返りカードを使用してきた。ただ、その活用が導入部分のみになっていた。展開後段においても振り返りカードを活用することで、同じ考えや異なる考えをつなぐことや、同じ経験をつなぐことができるようになる。また、問題意識が以前と変わってきたことを語るができるようになる。一時間の授業を通して振り返りカード活用して、見取ってきた児童の考えや意識を授業に反映できるようにしていきたい。

研究内容② 児童一人ひとりが確かに価値を把握するための工夫

(1) 子どもの考えを深める切り返しの発問

主に、中心発問では、子どもたちの考えをより深めるための、教師が切り返す発問が有効だった。価値が登場人物双方のみならず、周りに拡散していくことに気付かせる切り返しや、より高い価値に気付かせるために、段階を踏まえて発問する切り返しなど、価値把握をより有効にするために、適切なタイミングでの切り返しは欠かせないことが分かった。

(2) 内容項目B（主として人との関わりに関すること）の視点での板書の在り方

年間を通して内容項目Bの授業づくりをもとに研究を深めてきた。そのことを通して、教材に登場する人物双方の心情に迫っていく際は、自分と相手が板書の中心で向き合うような構造的な板書をするのが、子どもたちの価値把握の支援に有効な一つの手立てになることが分かった。また、キーワード、キーセンテンスは教材の内容理解をスムーズにするためにも適切に活用することが大切である。

(3) ねらいに即した価値把握の文言の精選

低学年という実態に照らし合わせ、価値把握につながる板書の文言はねらいに即したもので、より数を絞り、精選することで、つかませたい価値の理解につながるということが分かった。

研究内容③ 児童が聴き合い語り合う中で考えを深め、振り返りをするための工夫

(1) 展開後段での子どもの発言をつないだり、深めたりする教師の立ち位置と役割

展開後段では、教師が子どもの発言を他の子どもに繋げるような役割を果たしてきた。行為や体験場面のみを終始してしまう発言には、その際の心情を問うような声掛けをした。特に前者では、振り

返りが単発にならないように、その場面や体験を共有している他の子どもに、その話を投げかけるような、ファシリテーターのような役割が教師にとって重要になる。そのためには、振り返りカードなどを活用して、事前の子どもたちの問題意識を十分に見取っておくことが前提となる。しかし、それが不十分となり、展開後段の構想を描くところまでイメージしきれなかった。今後、子ども同士の発言をどうやって繋げていくか、周りの子どもたちの意識をより深めるようなキーとなる子どもへの発言の促し方など、展開後段の構想を事前に十分に練ることを大切にしたい。

(2) 日常の指導（話す聞く指導、振り返る習慣づけ、振り返り方の指導など）

振り返りを充実させるための土台として、親和的な学級づくりや、「聞く・話す」の指導の積み重ね、確かな価値把握とその価値に照らして振り返ることの大切さを各実践で大切にしてきた。ただ、低学年の子どもたちには、振り返りで話す前に、出来ていたことや出来ていなかったことなど、その時の気持ちまで思い出せるように話す手がかりに注目させたり、示したりするなど、より丁寧な事前の準備が必要であった。他の様々な教科・領域で行う振り返りにおいても、互いに語り合えるような言葉「～の話を聞いて思いましたが」などを日常から意識的に使えるように指導することが大切である。

《今後の課題》

- 全体と個の問題意識の高まりや変容を十分に見取り、展開後段にも活用するための学習の総合化の工夫
- 価値を捉えやすくするための発問と板書の工夫
- 展開後段で、子どもの発言を繋いだり、深めたりするための教師の声掛けなどの工夫

【高学年研究部会】

《成果》

研究内容① 児童が主体的に問題意識を高めるための学習の総合化の工夫

(1) 内容項目に対する実感をともなう今の自分の捉え

一定期間、今の自分を振り返って、内容項目に対して日々の自分がどんな姿かを見つめる活動を取り入れた。児童は、普段の生活を振り返る活動を通して、自分自身の課題を見つめることができた。さらに、この個の経験と感じたことをクラス全体で共有することで、問題意識を共有することができ、自分自身では気付いていなかった問題意識にも気付かせることができた。振り返りの活動の中で、うまくいった心地よさを実感できたからこそ、うまくいかなかったもどかしさが主体的な学習課題に繋がることが分かった。

(2) になりたい自分に対して、今の自分を見つめること

学習の総合化の中で、どんな自分になりたいのかを児童が立ち止まって考える機会をつくり、その上で、今の自分を見つめることが有効であることが分かった。理想の自分と今の自分を照らし合わせることで、そんな自分になるためにどんな考えが大切なのだろうと前向きに今の自分の課題を捉えることができ、それが本時のねらいにもつながる問題意識となることが分かった。

(3) 今の自分を視覚的にとらえる工夫

高学年研究部では、メーターで数値化する、視覚的に今の自分の位置を確かめる、星の数で今日のふり返しをするなどして、になりたい自分に対してどのくらいの数値であるかを、理由とともに考える活動を取り入れた。そうすることで、客観的に今の自分を見つめることができ、今の自分に足りないことはどんなことかを一人ひとりが把握して本時の学習に取り組む手立ての一つとなった。

研究内容② 児童一人ひとりが確かに価値を把握するための工夫

(1) 教材に登場する高い価値を実現している人物と自分自身を比べて考える

中心発問をする前に、「自分だったらどうか、なぜそう思うのか。」という教材に登場する高い価値を実現している人物と自分自身の見方や考え方を比べることのできる投げかけをした。これによって、中心発問において考えるべき価値の高さを実感し、児童の様々な考えを引き出す手立てとなった。

(2) 価値の実現に向かう姿を視覚化した構造的な板書

登場人物の価値の実現状況に着目し、そのときの心情を曲線で表すことで、人物の見方や考え方がとらえやすくなり、構造的な板書作りの一つの手立てとなった。

(3) 価値を実現している人物の考え方に焦点を当てる補助発問

中心発問をさらに深めるための補助発問において、教材に登場する人物が価値を実現している時には、「どんな考えをもった人なのかな。」など、その人物の考え方に焦点が当たる聞き方をすることで、中心発問では出なかった考えや、道徳的価値の理解につながる考えを引き出す手立てになった。

研究内容③ 児童が聴き合い語り合う中で考えを深め、振り返りをするための工夫

(1) 価値把握でつかんだ考えをもとにした振り返り

展開後段に入るときに、前段で出てきた子どもたちの考えから、研究内容①で思い描いたなりたい自分に近づくために大切だと思った考えをそれぞれが選んだ。そうすることで、それまでの自分を振り返った際に、どういう考えが必要だったのかを話すことができ、問題解決につながる事が分かった。自分が大切にしたい考えを決めるときには、ワークシートを使うことも有効であった。

(2) 友達の考えを聴き合うための手立て

本時を迎えるまでに、友達がどのような思いや考えをもってきたのかを表や図にまとめ、視覚化しておくことで、「〇〇さんの話が聞きたい。」と児童が話す場面があった。また、他教科においても「次は誰の考えが聞きたいかな。」というように、友達の考えを聞いて考えを広げたり深めたりしていくことを積み重ねていくことで聴き合いが成立していくことが分かった。

(3) 学習の総合化を生かした振り返り

学習の総合化の中で、本時に向けて児童が互いに関わっていく時間を様々な場面で設けていくことで、互いのことを考えたり、理解したりしようとする思いが高まった。後段では、本時に向けて振り返りカードやワークシートに書き込んでいたものとは異なる場面での振り返りをする児童も見られた。

(4) 児童による対話のつながり

話型を示して話しやすくしたり、グループによる対話の場を様々な教科で設けたりすることで児童は自分たちで対話をつなげていこうとし始める。そこに教師が意図的指名をしたり、異なる体験場面でも大切にできる考え方をたずねたりしていくことで対話が充実し、多面的・多角的な見方や考え方にせまるものになっていくことが分かった。

《今後の課題》

- 児童が主体的に問題意識を深められるような学習の総合化の工夫
- 自己を深く見つめた振り返りができるよう、児童一人ひとりが確かに価値を把握するための工夫
- 児童が友達の考え方や経験を聴くことでねらいに対する考えを深められるよう、教師が児童の考えをつないでいくための工夫

【研修部会】

成果

- ・45分の道徳の授業の進め方をよく理解してワークショップや研究協議に参加している参会者が多く見られるようになった。例えば、子どもたちが価値を捉えるためにはどのような発問構成がよいか、どのような文言がよいかなど、発問ひとつひとつにこだわって考える姿が挙げられる。これは内容項目をよく分析しており、捉えさせたい価値が念頭にあった上で、児童の実態と教材を照らし合わせて考えているからである。また、「自分だったらこうする。」という意見や以前に実践したときの様子などを交えた意見も多く聞かれた。これは普段から道徳の授業を実践していると共に、研修で学んだことを生かし、日々の授業を積み重ねているからだと考える。役員が全て進めなくてもよいくらいに活発な意見交換が毎月行われるようになり、参会者同士の相乗効果で身のある研修を実施することができ

- た。研修部会の会員の資質や毎回のワークショップの質が向上していることを目の当たりにできた。
- ・昨年度は行うことができなかった市一斉研を今年度は実施することができた。授業展開を考えるワークショップを行い、模擬授業を経て、本時を迎え、研究協議をするという流れは、11月から集合開催ができるようになったというタイミングも重なり、授業者にとっても参会者にとっても有意義な研修となった。実際の実践では、特に「学習の総合化の充実」が挙げられた。普段の生活での様子を振り返り、それを学校行事の振り返りにも生かし、掲示物として残しておいた。その掲示物も「できていた姿」や「できていなかった姿」がわかりやすく書かれていた。児童にとって、問題意識を共有したり、高めたりするための有効な手立てとなった。展開後段ではその掲示物が生きた発言が多かった。これは、10月のワークショップの際に「ヒントシート」P4、5参照を授業者と一緒に作成したことで、事前に児童の実態を丁寧に見取り、指導の方向を定めることができたためと考えられる。参会者にとっても授業者の学級の実態がより頭に浮かび、授業展開を考えやすかったようである。当日の協議では、授業者の日々の粘り強い取組もあり、多くの参会者から参考にしたいという意見が寄せられた。
 - ・1月にグループで考えた展開案を使って、2月にそのグループの代表者が模擬授業をするというワークショップを行った。12月の市一斉研で扱った教材の内容項目がC-規則の尊重であったことと教材には価値のよさにあたる内容が描かれていなかったことを踏まえて、今回の教材もそれらの特徴をもったものを選び、展開案を考えた。12月の実践を生かすことができ、かつグループで考えた案が模擬授業という形になって検証できるので、参会者にとってより実践的な研修となった。



☆来年度に向けて

本研究会としては、昨年度の経験から、全体での集合研修が行えない中でも、オンライン等を活用し、会員の皆様と協議を重ねることで、より充実した研究会とすることができた。

来年度も社会情勢の見通しがなかなか立てることは難しいが、試行錯誤しながらも、ZOOMなどのオンラインを更に効果的に活用し、会員の皆様のニーズに合った研究会にしていきたい。